

PHD LETTER

59

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1996・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 何か変わった？ トーコちゃん…………… 3 P
- スム・ソコム君を訪ねて…………… 6 P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：草地 賢一
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
定価：100円



ネパール、マンナンマハデプスタン

クンタ村ですれちがった少年。
子山羊を連れて山道を降りてきた。
エサにする草や葉を入れるかごを
額にかけている。
子どももだいじな働き手。

神戸のまちから ~まだまだ続く震災復興への道のり

4月1日にPHD協会に帰ってきました。一年以上にわたって私の抜けた間PHDの事業を担ってくれた職員に感謝するとともに、このような体制を承認し送り出して下さった理事会にも併せて心からの感謝を申し上げます。

事務所に毎日出ているものの、実際の日常はまだまだ3月まで進めてきた阪神大震災地元NGO救援連絡会議関係の動きが中心です。従って連絡会議の事務所にも必要に応じて出かけています。

連絡会議は96年3月末で終了する事を前提としていました。それは何回か活動途中で内外に表明してきました。ところが、昨年暮れから震災一周年の時期にかけ、連絡会議の関係者から存続の意見が強くなりました。

その内容は、主に震災救援活動で注目されたボランティアの活動を継続する必要がある、とくに民間の、純粋に民間のボランティア、NGOの旗を立て続けたいといけない。なぜなら震災前にあったような市民が行政にすべてを依存し、また行政がボランティアを自分たちの都合で下請け、補完に使ってしまうような状

況が当たり前になってしまう、というものでした。

関係者による協議の結果、継続することになり、事務所を長田に移すこととし、4月からの運営について話し合いました。

①連絡会議は被災地内外に救援、復旧の活動と、その中にある問題、課題を発信する。

②連絡会議は95年度の経験をふまえ、現在も活動を続ける各地域の団体、グループをネットワークする人々の間にあって連絡調整する役割を担う。

③被災者の復旧の条件づくりなどに必要な世論形成のための提言活動などを進める。

④これらの働きを進めるためにボランティア養成に力を注ぐ。

以上のようなまとめをしたあと、私は専従から非専従の代表となり、日常的には運営委員会の幹事と事務局のスタッフに運営を託しています。

しかし徐々にPHD協会の運営に仕事のウエイトを移していこうと思っています。特に力を入れて取り組みつつあるの

昨年も、震災支援で盛り上がったボランティア活動をその後の日常的な活動として定着させよう、国外への活動にも目を向けてもらおうと、6回の連続セミナーを行ないました。今年は少し視点を変えて、国際理解や協力を考える時に、基本となる事柄を講義形式で伝えるのではなく、ゲーム、ロールプレイ（役割劇）、シミュレーション（模擬体験）などの参加型の内容で気付いてもらおうという4回のワークショップを5月、6月に組みました。これは一方的なメッセージでなく、自らによる気づきを促そうというものです。

こういったやり方は、海外の開発の現場でも重要視されているもので、こちらの思いを一方的に押しつけるのではなく、相手の自発的な気づきを大事にしようというものです。強制では一度はできても続かない、長く続けるには、自身に必要なと思う動機づけがないと・・・そんなことを思っただけの今回のワークショップ。これまでの海外経験やイギリス、オーストラリア、インドの資料などからプログラムを選びました。

各回だいたい30人が集まったの2時間。1回目はアジアの風景のスライドを説明無しと説明付きで見ての違い、自身

は財政の問題です。

昨年95年度は震災による特別な状況の中で、特に全国からのご支援でPHD協会の財政は幸いにも満たされました。しかし今年度は極めて不安定で厳しい見通しです。というのは会員、協力者の約3割が被災地在住の方々であるからです。すでにそれらのひとびとの何人かからは支援の継続が困難であるとの意思表示がなされています。

そういう不安の中で私たちは「被災地から国際協力の灯を消さずに続けていきたい」との切なる願いをもっています。さらに今日までPHD協会が活動継続の最大基盤においていた市民による参加、支援の動きを逆に今回の震災の中でより強化したいと願っています。

今までも増して、みなさまのご支援をいただくとともに新たな支援者の増加に協力をお願い申し上げます。具体的には、会費105,000円のPHD会員、できれば3,000円程度を支援して下さる友の会会員を近くの方々に呼びかけていただき一人でも多くの方が加わって下さるとありがたいです。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

総主事 草地 賢一

の持つイメージとの差を知る作業と危機状況におかれた10人をどの順位で救い出すかを個人とグループで決める「順位付け」の作業、そこからは様々な人間に対する価値の認識が見えてきます。

2回目は、テレビの取材も入り、レポーターも加わってのロールプレイ。ふたつに分かれて、異文化体験をするもの。もうひとつはコミュニケーションの難しさを実感する作業。皆、とても真剣に取り組み、そこからの気づきには大きいものがありました。

3回目は、世界の経済のしくみ、公正な分配を考える寸劇とチョコレートをめぐるシミュレーション。最終回はスクエアゲームを通じて協力することの大切さを考え、その上でこの4回を通じて気付いたことをどうやって他の人に伝え、仲間を増やしていくかの作戦会議で締めくくりました。

この種の試みの1回2回で目的が達成されるものではありませんが、根本となるものの理解を広めていく積み重ねがいずれ形となってあらわれることを願うものです。この種のワークショップは出前もします。興味のある方はご連絡下さい。

(藤野)

〜何か変わった？ トーコちゃん〜

大学1年生の時からPHD協会事務所に入出入りし、いろいろなプログラムの企画・運営に参加してきた篠原登子さん。卒業後NGOでの滞在を中心とした8ヵ月をインドで過ごし、いろいろな体験をしてこられました。

編集部（以下へ）：昔から途上国で働くのが夢だったんです？

登子（以下と）：そう。卒業後インドに行くって決めた大学4年生の初め頃まではね。

へ：てことはそれから考えが変わった？
と：うん。PHDの活動や考え方を知っていくうちに、国際協力ってのは外部の人間が現場に飛び込んでやるだけではなくさそうだと思うようになって。だから、最初インドに行くって決めたときは、現地で働きたいけど今の私には技術も知識も何もない。だけど今、現地では何が必要とされているのかをまず見てこよう、と思ってたわけ。でも最終的にインド行きの目的は「ちょっと途上国で暮らしてみよう。その経験は今後国際協力やっていく上で何かの役に立つやろ」というくらい、イカゲンなものになってました。

へ：でもなんでインドやったん？
と：理由は簡単。こんな私のためのプログラムを立ててくれることができる人として、PHDが紹介してくれたのがNGOコンサルタントのポール・シロモニ先生。彼がカルカッタに住むインド人だったから。別にサイババに会いたかったわけでもヨガの修行で悟りを開いて新興宗教始めようと思っただけでもありません。

へ：ところで日本のNGOとインドのNGO、だいぶ様子が違ってたでしょ。

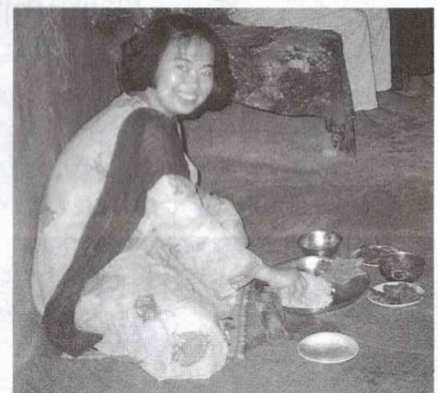
と：まず規模が全然違う。インドのNGOはでっかい所が多かった。それから日本ではNGO＝国際協力のボランティア団体でしょう。でもインドではNGO＝日本でいう福祉団体。あるいは日本では保健所や学校がやってるようなこともNGOがしてました。例えば乳幼児検診や予防接種をしたり、普通の学校には経済的にいけない子どものために夜間の学校を開いたり。

へ：実際にどんなNGOにワラジを脱いだの？

と：ムラの開発を進めるグループ、女性の地位改善に取り組むグループ、あるいはスラムや児童労働などの都市の問題を扱うグループなどです。それにあの有名なマザー・テレサのところも。

へ：外国のNGOはどういう形でインド

を支援してた？
と：インドの場合、地元のNGOがすごくしっかりしてるところが多いから外国のNGOが主導権を握るとい形は少ないみたい。インドにはインドのやり方がある、それは外国のNGOには簡単に分かるもんじゃないと思う。インド人のNGO職員たちでさえ、どうやって現地の人に溶け込むか、どんなアプローチがその地域の特性に合っているのか悩みつつやっているのが現状なのに。だから、現地の人たち、NGOが主体で、外国のNGOはそれを外側から支えるという関



家庭に招かれ食事中（西ベンガル州で）

係でお付き合いをするのがいいと違うかなあ、と思いました。その相手のNGOを見極めんのが難しいんだけど・・・。

へ：それってインドの場合のみに言えること？

と：うん、どこの国の場合でも同じだと思う。国際協力の、開発援助のNGOがどっかの途上国を援助する場合って、お金とか時間とかの労力の割にはあまり報われてないなあって気がする。それだけならまあいい。ソソってるのはこっちやから。でも、外国からボンと入ってきたNGOってどこまでその国のために、その地域の人たちのためになる活動ができるんやろ。結果がうまくいけばいいけど、そうじゃなく、ひっかき回すだけに終わるなら何もしないほうがましかもしれない。何もしないよりは失敗に終わるかもしれないがやってみる方がいい？でもそれで失敗した時に「ごめんなさい」で済むかなあ。インドのNGO活動を見ていて、私たちが絶対にはやらないだろうと思われる方法を取っているケースを何度か見ました。でも、よく話を聞いてみるとそれが一番いい方法であったり、あるいはそうせざるを得ない社会状況が背後に隠れていたりしました。そのところを外の人はいったいどこまで理解できるのかなあ。

へ：今の日本のNGOの多くは何らかの

形で外に出ていっているでしょ。それを全部否定するの？どこのNGOも試行錯誤を繰り返して、葛藤もしながら、より良いと思われる道を探していると思うけど・・・。

と：全部を否定するわけじゃないけど中には勘違いNGOもあると思う。本来的にNGOって『いいこと』をやってるわけですよ。でもその思い込みが激しければ激しいほど、その活動にマイナスの面があることに気付くのが遅くなるだろうし、もしかしたら全く気付かないかもしれない。NGO活動には必ずプラス、マイナス両方の面が出てくると思う。なかなかすぐ目に見えるものではなかったりするけど・・・。

へ：じゃあ、登子ちゃんは今後どう国際協力にかかわっていくつもり？

と：それがインドに行ったせいでよくわからんようになってきて・・・。昔はよかったわ。単純に『かわいそうな人に何かしてあげたい』と思って、歳末助け合いの時期に海外向けって指定して送金してたら満足できたから・・・。

へ：ところで『国際協力』って何なんやろね。国際協力という相手側を変えようとしがちだけど。例えばインドと日本について考えた時に、ある問題がインドのその地域の中に原因があり起こっているものとしたら、それは日本の私たちに関係ないかもしれない。でも国際、国と国の関係の中に原因があるのなら私たちに責任がある。このふたつは分けて考えないとね。

と：なるほど。そう考えたら私としては、前者は地元のNGOに任ずると割り切りたい。実はインド行く前から薄々思ってたんだけど、日本がほかの国に及ぼしているマイナスの影響をなくすこと、私たちの生活を見直して迷惑をかけていたらそれを減らしていくこと、一見地味だけどそれが一番根本的な国際協力なんじゃないかなあ。

へ：PHDの研修生が日本に来て自分の村、国のことについて目を開かれるのと同じようにこちら側の目を開くことも大切なんだろうね。

と：そういうことって一人で考えていてもラチがあかんから教師になって、わかる人を増やしたいと最近思い始めたんだけど、どお？

へ：だんだん将来が見えてきたね。PHDの人づくりは海外の人だけが対象じゃないって実感できるわ～。

と：へへ・・・。

13期生

研 修 生 レ ポ ー ト

14期生

3月21日から30日まで、13期生のビショさん、カエウさんはフィリピン、ルソン島中部のヌエバエシーハ州ガバルドンでCommunity Organizing—地域組織化についての研修を受けました。地域組織化の内容とPHD協会の海外協力団体のひとつであるSAFRUDI(注)がすすめる村づくりの考え方、方法を紹介します。

「村づくり」というと、水道を引いたり、トイレを作るというような結果に目を向けがちです。けれども誰が、どのようにすすめるのか、そこにいたるまでの過程が大切なのです。

今回訪れたガバルドンでは、外部から来た人が何かをするのではなく、そこに住んでいる人が自分の抱えている問題に気付いて、それを解決していく過程に参加していきけるように地域組織化を行っています。

地域組織化は、いくつかの段階を経て行われます。まず、村の外から入った人(Organizer)が政治、経済、文化等も含めた村の状況を把握し、同時に、村の中からリーダーとなる人を探して育てていきます。村の人を巻き込むことによって、彼ら自身の手で色々な活動が行われるようになります。大切なことは、外から入った人が効率良く問題を解決しようとするものではありません。地域組織化の過程を通して、村の人自身が村の問題に気付いて、意識が高まり、自分で解決しようとする事なのです。

ガバルドンで活動しているSAFRUDIは地域組織化を行う中から、女性のグループや農民のグループを作って村の生活改善に取り組んでいます。SAFRUDIのスタッフがグループ作りを行うのではなく、ゆっくりと時間をかけて、何回も話し合いながら、村の人が中心になってグループを作っています。

女性のグループは約15年前から始まりました。主に栄養、衛生の問題に取り組んで

います。その中で、栄養不良の子供に食事以外に1日1回の補助食を与えるプログラムを見学しました。このグループでは、子供に補助食を与えて、体重を増やしていくことはもちろんですが、そういう実際の効

フィリピン比較研修

果よりもむしろ、お母さんが子供の栄養や衛生、健康管理等に興味を持つことを大切にしています。参加していたお母さんの一人は、子供が病気をせずに成長していくた



左より、ビショさん、93年度短期生ヨリーさん、右からカエウさん、国内研修生谷さん、村のサリサリストアの前にて、

めに、どうすればいいのかを考えるようになったと話していました。

農民のグループは昨年始まったばかりです。山の本がほとんど無くなってしまっている等の環境問題や、農薬の害、またその経済的な負担を考え合わせて有機農業をすすめようと試みています。メンバーには有機農業は環境や健康に良いという理解と、それに対する興味は充分にあるように思えました。けれども、実際に誰が、いつ、どんな形で有機農業を始めるのか、というような具体的な話になると、「もしも、失敗したら私の生活はどうなるのか」というところで先へ進めなくなってしまうよ

うでした。「もしも、失敗したら」実際に困るのは彼らとその家族で、外からやってきた人ではありません。外の人間が、有機農業が必要だという知識や技術、資金を持ち込んで地域の人に指示を出して行くのではなく、時間はかかっても結果として起こる影響を直接受ける人が、必要を感じて、自ら始めるのを待つやり方はとても現実的であるように思えました。

ビショさんは、送り出し団体であるSSS(サマ・セリ・サム)の活動との比較をしながら、熱心に見学していました。村での活動はだいたい同じということでしたが、その

中でも農民のグループとの交流は、大変興味深かったようです。交流のあと「(もしも失敗したら…と話していた)あの人は本当の気持ちを話していましたね」と、ビショさん自身がネパールに帰ってから日本で勉強した有機農業のことを伝えていく大変さと重ねあわせて考えているようでした。カエウさんは、ガバルドンの村とカンボジアの自分の村を比較して「フィリピンの村は井戸も家の中にあるので、みんな手を洗ったりできるし、トイレもあっていいですね」と、自分の村とは少しずつ事情の違うフィリピンの村の生活の工夫を参考にしていたようです。

(注) SAFRUDI=Social Action Foundation for Rural & Urban Development Inc.

都市と農村の両方から生活改善に取り組む団体。毎年、研修生が帰国前に出身地域とこれまで学んできた日本、さらにもうひとつの地域の村づくりを比較するために訪れます。93年度の短期研修生オリンピアさん、今年度のミノさんの送り出し団体でもあります。

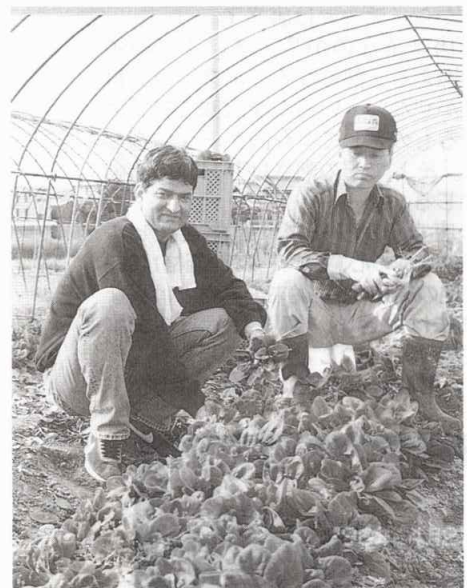
ビショジョティ・サプコタさん (ネパール)

中野宗嗣氏(兵庫・春日町)～渋谷富喜男氏(神戸市西区)～菜のはなの会(神戸市垂水区)～山崎佳彦氏・和歌山県海友会(有田市、和歌山市)～安達一博氏(豊岡市)

フィリピン研修旅行を無事に終え、暖かくなってきたところで、野菜栽培の研修を中心に学んでいます。技術的なところでは、やはり土づくりが中心となりますが、多品種少量栽培が農薬・化学肥料といった農業への多額の投資を減らしていくことにもつながるため、混作や輪作の方法について関心を持っています。

これまで多くの農家で滞在しながら研修を続けてきましたが、お世話になってきた方々はそれぞれ教育、行政、農協、ボランティア等いろいろな活動に取り組んでいます。そういった地域活動への参加から組織運営、コミュニケーションの方法等を熱心に観察していました。リーダーとして何が要求されるのか、実際の例から学ぶことができました。

帰国を控えて、まとめ、レポート作成等で忙しくなっています。



渋谷富喜男さん宅で野菜づくりを学ぶビショさん

ビルマのカイン・ソーさんは、出国許可がおりず、来日が遅れていますが、残る3名は4月20日に来日しました。神戸YMCAとPHD事務所での日本語研修を終え、それぞれの研修が始まりました。

全く異なる言葉・文化の地域から来た研修生にとっては、まだしばらくは研修を深めていくというより慣れていくことで一杯でしょう。



PHD協会で日本語の復習をするビドゥルさん(左)とウピさん

ウピ・タンジュンさん (インドネシア)

5月の連休時は神戸市中央区の中馬美恵子さん宅、それ以降は神戸市西区の細見安男さんのお宅でお世話になっています。細見さん宅は今回初めて研修生を引き受けていただきましたが、海外滞在経験が豊富で、ウピさんの気持ちをよく理解していただいています。保健衛生の研修が進んできたなら、看護婦のお母さんも先生に?元氣なウピさんの日本語は少々早口です。

帰国間もないカエウさん(13期生)を訪ねてきました

フィリピンでの比較研修を終え、4月1日にカンボジアに帰国しました。

カエウさんの家は2人のお姉さんの家族も含めて12人家族です。家の仕事もこなしつつ、来日前にかかわっていた識字教育の先生やバティ郡で活動しているNGOの事務所を訪ね、日本で勉強したことを話したりしながら、これから具体的にどんなことができるのか一生懸命考え

ビドゥル・ビスタさん(ネパール)

以前、インドネシアのサムスアリスさんをお世話いただいた西宮市の芝川恵子さん宅がホストファミリーです。ビドゥルさんは来日前に日本語を相当勉強してきたので、今のところ一番よく話しています。ビショさんがいるのも心強いでしょう。



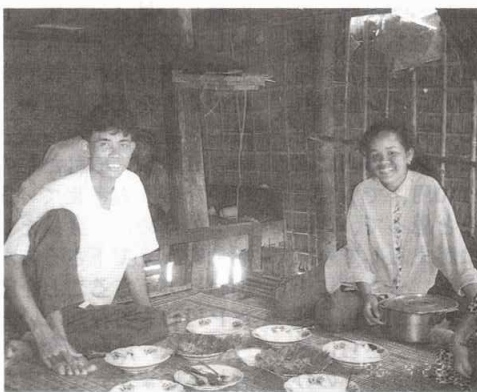
ミノさん

マキシミニアノ・T・トレドさん (フィリピン)

ミノさんで4人目の研修生をお世話いただく西宮市の梶原正徳さん宅。ここではミノさんは2人の子どものお兄さん。フィリピンに3人の子どもを残して来ているだけにとても仲良くしています。無口だと思われていたミノさんですが、最近は日本語がたくさん出てくるようになりました。お酒を飲むととても陽気な人です。

ていました。

近所に住む11期生ノップ・ヴァナさんにも会いました。家族と一緒に米、野菜、マンガー等を栽培しています。とても元氣そうにしています。



バティ郡で出会えたヴァナさん(左)とカエウさん

(谷)



編 集 後 記

本誌「PHD LETTER」の編集後記は「編集後記」という名のコラムとして、編集長から指名されたボランティアの人とかが思いのままを書いたんですが、今回は「ホンマの編集後記

を書くべし」との編集長の命を、私が受けました。

気づいてる人もいるかも知れませんけど、本誌は54号（昨年4月）より変わりました。どこが変わったかといえば、それまでデザインとか版下作製とかをプロの人に頼んでたんですが、経費削減のためWINDOWSとかDTPソフトとかを導入して自前で行うようになったんです。それで字とかが今までは写植だったのがコン

ピュータの字になったりと、何となく変わってます。

その分事務所での作業が増えたわけですが、原稿のワープロ入力（一太郎、OASYS）とか編集作業（Page Maker）とかをお手伝い下さる方おられましたらお願いしたいです。最近は編集に携わる人も固定化してるんで新たな風を吹き込んでくれる方をお待ちしております。

WAT'S

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。